

生物部に入った頃の記憶

中條主也(21 回生)(2017.2. 9 受理)

小学 6 年の、たぶん秋だった。善通寺の従兄弟の家から坂出の実家に、自転車で国道を飛ばしていた。宇多津に入ると、国道が青ノ山と塩田の枝条架に挟まれて、国鉄と並走する所があった。そこで自転車の変なおじさんと抜きつ抜かれつして、「おまえ、走るん早いのお」と話しかけられた。そのおじさんの顔は笑っていた。それからしばらくして学校で中学校の説明会があったが、大手前から自転車で来たのは、どうもあのおじさんだった。そして、この生物部の顧問をしているという先生の話は他の学校の先生より格段に面白く、解りやすかった。ために、話が終わる頃には、もし大手前に行ったら生物部に行こうと思うようになっていた。そして、冬が来ると付属を落ち、春には大手前に行くことになった。

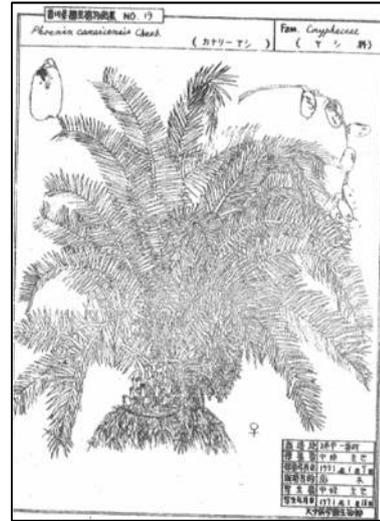
入学すると、和気先生は生物の先生で生物部の顧問というだけではなく、中学 1 年の学年主任でもあった。この和気先生が顧問ということもあるが、とにかく生物学が好きだったので、生物部が何をしているのかよく知らないまま生物部に入りたがっていて。取りあえず昼休みに 1 人で生物室に行ってみると、広くて暗くて誰もいなかった。電気が点いている隣の生物準備室に回ってみると和気先生がいて、入部を願い出ると、先輩達が活動している放課後に来て何をしているか見て考えるように言われた。別の日の放課後、友達 2 人を連れて生物準備室に行くと、植物の写生をしていた先輩方は帰化植物について教えてくれて、そこにあったオシロイバナで写生のテストの様なことをして、3 人は合格した。



入部すると、生物部では「香川県 帰化植物図集」なるものを作っていた。先生に教えられた帰化植物を採集して、何日かかけて写生し、先生が原稿に仕上げ、原稿の数がまとまると製本して図集にするのだった。先生は写生については一切口を出さず、構図、描く部位、描き方などは部員の好み・判断に任せ、部員は互いの作品や「牧野さん」と呼ばれる図鑑を参考にしながら写生し、先生は描かれたものがその植物に見えるかどうかで判断して希に没になった。入部して最初にできた図集は VOL3(写真は図集の表紙)で、この中には前述のオシロイバナを描いた新入生の作品も先生の紹介文と一緒に載っている。先生が学年主任のためか、生物室の掃除は中学 1 年女子の担当になっていて、部室によく出入りする女子生徒が多数入部し、つられるように男子生徒も次々入部したが、幽霊部員も続出した。「生物部なのに絵を描いているだけだ」と言う者もいたが、

写生作品・図集が完成する達成感や描く技量が上達していく実感だけでなく、写生している植物に愛着を感じ、引いては植物・生物に愛着・感心を持つようになり、同じような仲間もいて十分やる意味を感じていた。部員が増えると「香川県 園芸植物図集」「香川県 野生植物図集」なども手がけ

るようになっていった。この頃で忘れられないのが「フェニックス(正式名は写真にあるカナリーヤシ)」で、今では校舎の前で立派なヤシになっているが、あの頃は頭半分だけで可愛かった。生物室の前のベランダに出て描いたのだが、このややこしい葉っぱを描き上げた時、どんな植物でも描けるようになったと誇らしく思ったものだった。そして、ここに拡大して描いた「実」も、今では坂出の実家で 15m 程のヤシになっている。



この頃、和氣先生は「琴平山の植物の研究」をしていたので、植物採取には主に象頭山に連れて行ってもらったが、帰化植物を求めて港や塩田跡地にも出かけた。「アツケシソウ」や「セイヨウノダイコン」など、自分の家の近くで先生が県内新種の帰化植物を見つけるのは驚きだった。また、この頃の生物部には和氣先生の2人の娘さんが在席していて、妹の瑞江さん(今や我が国の人形劇の世界で知らない者はいない・・・らしい)は同学年だった。そして、生物室の隣の購買部には先生のお母さんも勤めていて、先生に用がある時には、「ちょっとちょっと、トッチャン、トッチャン」と言って部室に来るのだった。

今から思うと、あの頃は先生にとって、ある意味でエポックだったのではないかと思う。🐸

